

# 心理的援助の専門家への援助要請における 諸変数間の関連の検討

永 井 智<sup>\*1</sup>・小 池 春 妙<sup>\*2</sup>

## Relationship among Factors of Seeking Professional Help

NAGAI Satoru and KOIKE Harumi

### Abstract

This study investigated the relationship among factors of seeking professional help in Japanese university students. Two hundred and thirty-eight students completed a questionnaire about their attitude toward seeking professional help, intention to seek professional help, concerns regarding counseling, expectations from counseling, help-seeking preference, and previous counseling experience. An analysis of variance indicated that (a) students who have previous counseling experience had a more positive attitude and willingness to seek professional help and (b) there was no significant gender difference. Further, a factor analysis showed that although most variables were classified into two factors, the intention to seek professional help was not included in them.

[Keywords] help-seeking, help seeking preference, attitudes

### 問題と目的

個人が問題を抱えた時に、必要に応じて他者に援助を求めることは、重要な対処方略の一つである。特に心理的な問題への援助において、カウンセリングや心理療法などの専門的な援助を受けることは大きな効果を持つ (Smith, & Glass, 1977; Wampold, 2001)。そのため、自身や身近な他者の力だけでは解決できないような大きな問題に直面した場合は、専門家の援助を受けることも有効な手段である。しかし、深刻な心理的問題を抱える者が実際に専門的な援助を求める割合は、必ずしも高くないことが各国で報告されている (e. g., Andrews, Issakidis, & Carter, 2001)。

我が国においても、専門医による診断や治療も受けずに自殺へと至る大学生が多く存在し、自殺既遂学生の内、大学内の保健管理センターが関与できたケースは20%程度しかないことが明らかになっている (内田, 2011)。こうした問題を少しでも減少させるためには、問題の予防に加え、問題を抱えた者が適切な援助を受けられるようなシステム構築が必須である。そしてそのためには、専門的な援助を求める行動のメカニズムについて明らかにする必要がある。

専門家など、自分以外の他者に援助を求める行動は、心理学において援助要請行動と呼ばれる (DePaulo, 1983)。海外では、専門家への援助要請に関する研究がこれまで多く行われてきた。先行研究においては、Theory of Planned Behavior (TPB; Ajzen, 1991)などを理論的背景として、援助要請に対する態度が、援助要請の主要な規定因であるとされている。態度の測定には、Fischer & Turner (1970) による Attitudes Toward Seeking Professional Help Scale (ATSPHS) が最も有名であり、ATSPHSを用いた研究は非常に多く存在する。またこの尺度は、単因子構造の短縮版も作成されており (Fisher & Farina, 1995)、近年ではこの短縮版が用いられることが多い。

しかしながら、諸外国における研究の多さとは対照的にわが国では、専門家への援助要請に関する研究はまだほとんど実施されていない。もちろん、既にいくつかの研究は報告されているものの、援助要請に対する態度と援助要請意図

---

\* 1 立正大学心理学部講師

\* 2 名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程

との関連といった、海外の研究においては極めて基本的な事柄についても、十分は検討はなされていない。また、研究によって用いられる尺度が異なっているなどの問題があり、十分な知見の統合には至っていない。そのためまずは、我が国における専門家への援助要請に関する研究では、援助要請における基本的な諸変数が、互いにどのように関連するかなどの、基礎的な知見を蓄積していく必要がある。

そこで本研究では、まずこの援助要請に対する態度と援助要請意図に注目し、援助要請に関する諸変数との関連を明らかにするための調査を行う。関連を検討する変数としてはまず、援助要請期待と援助要請不安に注目する。また、専門家への援助要請における直接の心理的変数ではないものの、当該領域において検討されることの多い、被援助志向性と、心理的援助の専門家の利用経験、性別との関連も併せて検討する。

## 関連を検討すべき変数

**援助要請期待と援助要請不安** 近年の研究では、態度に加えて援助要請の説明変数として、援助要請に対するポジティブな結果予期や期待と、ネガティブな結果予期や不安がそれぞれ用いられるようになっている。諸外国では、Vogel による一連の研究 (Shaffer, Vogel, & Wei, 2006; Vogel, Wade, & Hackler, 2008; Vogel, & Wester, 2003; Vogel, Wester, Wei, & Boysen, 2005) があり、わが国においては、中学生における友人への援助要請に対する利益・コストを用いた研究などが、これに該当する (永井・新井, 2007, 2008)。また近年では中岡・兒玉 (2011) が、専門家への援助要請における、援助要請期待および援助要請不安を測定する尺度を作成している。これらの変数は、しばしば援助要請検討の際に用いられることや、援助要請に対する態度との関連もよく指摘されること (Vogel et al., 2005) などから、援助要請に対する態度や援助要請意図との関連を検討すべきであると考えられる。

**被援助志向性** 被援助志向性とは、「個人が、情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家、教師などの職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」のことである (水野・石隈, 1999)。これは、援助を受けることに対する全般的な認知を尋ねるものであり、わが国においてはこの観点から比較的多くの研究が行われている (e.g., 木村・水野, 2004; 水野・石隈・田村, 2006)。ただしこれは、援助者を特定するものではなく、どちらかというとな全般的な被援助への認知を扱っている。そのため、こうした全般的認知が、専門家に特化した援助要請への態度や意図とどのように関連するかを明らかにすることは意義のあることであると思われる。

**心理的援助の専門家の利用経験** 先行研究からは、過去に専門家へ援助要請をした経験がある程、専門家に対する態度がポジティブであることや、援助要請意図が高いことが明らかになっている (Dadfar & Friedlander, 1982; Fischer & Turner, 1970; Halgin, Weaver, Edell, & Spencer, 1987; Vogel, Wade, & Haake, 2006; Vogel et al., 2005)。またこれと類似した報告として、メンタルヘルスサービスに従事している知人がいる者は、援助要請がより高くなることも明らかになっている (Tijhuis, Peters, & Foets, 1990)。わが国でも、スクールカウンセラーとの接触経験がスクールカウンセラーへのポジティブなイメージに結びつくことが報告されており (半田, 2003; 松岡, 2011)、専門家との接触経験は援助要請を促進する方向に機能すると考えられる。

しかし一方で、単に専門家に接触しただけでは、態度に差がみられるとは限らないという報告も存在する (Carlton, & Deane, 2000; Deane, & Todd, 1996)。一部の研究は、過去の援助要請経験そのものでなく、その際の満足度や知覚された有用性が、その次の利用意図に関係すると報告している (Cusack, Deane, Wilson, & Ciarrochi, 2004; Deane, Skogstad, & Williams, 1999; Raviv, Raviv, Propper, & Fink, 2003)。確かに、実際に専門家に会ったとしても、その経験がネガティブなものであれば、態度がポジティブに変容するとは考えにくい。これは、過去の援助・被援助経験が、その後の援助要請に際する結果予期に影響するという援助要請のモデルとも整合するものである (高木, 1997)。そのため、単に接触の多さだけでなく、接触の質も含めて検討を行う必要がある。

**性別** 援助要請との関連が最もよく検討される変数の一つに、援助要請者の性別がある。基本的に援助要請は男性よりも女性の方が高いことが、ほぼ一貫した結果として確認されている (Nam, Chu, Lee, Lee, Kim, & Lee, 2010)。こうした傾向は、わが国でも同様に報告されている (e.g., 永井・新井, 2009)。しかし専門家への援助要請に限った場合、こうした性差は見られなかったり (e.g., 木村・水野, 2012)、一貫した傾向が見られなかったりするなど (e.g., 中岡・兒玉・高田・黄, 2011)、十分な結論は得られていない。そのため本研究でも、専門家への援助要請における性差に注目し、検

討を行う。

## 本研究の目的

以上に挙げた、援助要請期待、援助要請不安、被援助志向性、心理的援助の専門家の利用経験、性別などは、いずれも専門家への援助要請に対する態度や援助要請意図を検討する上で基本的かつ重要な変数であると考えられる。しかしながら我が国ではまだ、こうした変数間の関連は十分検討されていない。そこで本研究では、これらの変数間の関連を明らかにすることを目的とする。

## 方 法

### 調査手続きと調査対象

調査は、2012年9～11月に関東地方の4年制大学2校における大学生計297名を対象に実施された。質問紙のフェイスシートには、匿名性が保証されること、回答が任意であり、協力しないことによる不利益は一切ないことが明記された。また、回収された質問紙のうち、59名分は記入に不備があったため分析から除外した。そのため、最終的に238名（男性84名、女性154名）分のデータを分析の対象とした。

### 質問紙の構成

1. 専門家への援助要請に対する態度 Fisher & Farina (1995) による、Attitudes Toward Seeking Professional Help Scale (ATSPHS) 短縮版の邦訳版（小池・伊藤、投稿中）を用いた。「もしわたしが精神的に参っていると思ったら、まずは専門家の治療を受けたい」「精神的・心理的な問題を解決する方法として、専門家に相談するという考えは良い方法ではない」など10項目について、「1：そう思わない」～「4：そう思う」の4件法で回答を求めた。

2. 専門家への援助要請意図 木村・水野（2004）が大学生における被援助志向性の研究で用いた項目を用いた。これは、大学生活における主要な6つの悩みを提示し、もしこのことで悩み、一人で解決できないとしたら、誰かに相談すると思うかを尋ねるものである。具体的には、「対人関係」「恋愛・異性」「性格外見」「健康」「卒業後の進路や将来のこと」「学力・能力」という6つの悩みを提示し、それぞれについて、カウンセラーにどれ位相談すると思うか尋ね、「1：相談しないと思う」～「5：相談すると思う」の5件法で回答を求めた。

3. 援助要請期待 中岡・兒玉（2011）による援助要請期待尺度を用いた。「内面安定期待」「専門的援助期待」「依存的解決期待」「知的学習期待」という4因子21項目について、「1：そう思わない」～「5：そう思う」の5件法で回答を求めた。

4. 援助要請不安 中岡・兒玉（2011）による援助要請不安尺度を用いた。「スティグマへの懸念」「強要への懸念」「カウンセラーの対応への懸念」という3因子18項目について、「1：そう思わない」～「5：そう思う」の5件法で回答を求めた。

5. 被援助志向性 田村・石隈（2001）による被援助志向性尺度を使用した。「援助に対する欲求と態度」「援助に対する抵抗感の低さ」という2因子11項目について、「1：あてはまらない」～「5：あてはまる」の5件法で回答を求めた。

6. 心理的援助の専門家の利用経験 まず、「あなたは今までに、カウンセラーなど心の専門家に悩みを相談したことはありますか？」と尋ね、「ある」「ない」で回答を求めた。また、この質問に「ある」と回答した者には、その際のポジティブな経験とネガティブな経験についても尋ねた。ポジティブな経験については、「カウンセラーに悩みを相談して「いいことや、よかったこと」はどれくらいありましたか？」と尋ね、「1：なかった」～「5：あった」の5件法で回答を求めた。ネガティブな経験については、「逆に、「いやなことや、相談しなければよかったこと」はどれくらいありましたか？」と尋ね、「1：なかった」～「5：あった」の5件法で回答を求めた。

## 結 果

### 各変数の基礎的分析

専門家への援助要請に対する態度、専門家への援助要請意図および、援助要請期待と援助要請不安の各下位尺度の記

Table 1 各尺度の男女別下位尺度得点の基本統計量

	専門家の利用経験				全 体		得点範囲	
	あり		なし		N=238			
	N=45		N=193					
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
専門家への援助要請に対する態度	27.58	(4.25)	26.01	(3.86)	26.30	(3.98)	10 ～ 40	
専門家への援助要請意図	14.80	(5.81)	10.97	(4.56)	11.69	(5.04)	6 ～ 30	
援助要請期待	内面安定期待	30.13	(4.57)	30.42	(4.73)	30.37	(4.69)	8 ～ 40
	専門的援助期待	18.56	(3.12)	18.89	(3.46)	18.82	(3.39)	5 ～ 25
	依存的解決期待	12.76	(4.42)	13.54	(3.74)	13.39	(3.88)	5 ～ 25
	知的学習期待	9.67	(2.49)	9.03	(2.66)	9.15	(2.64)	3 ～ 15
援助要請不安	スティグマへの懸念	22.02	(7.43)	23.93	(8.79)	23.57	(8.56)	10 ～ 50
	強要への懸念	9.29	(3.70)	10.08	(3.97)	9.93	(3.92)	5 ～ 25
	カウンセラーの対応への懸念	6.67	(2.82)	6.81	(2.19)	6.78	(2.32)	3 ～ 15

述統計を Table 1 に示す。後述するように、いくつかの変数には専門家の利用経験の有無による得点差が見られたため、専門家の利用経験の有無による記述統計も併せて Table 1 に示した。

また調査対象者の内、過去に専門家の利用経験のある者は45名（18.9%）であった。これらの利用経験者における、利用の際のポジティブな経験

とネガティブな経験の平均値を比較すると、 $t(44) = 6.59$   $p < .01$  であり、利用経験者は、ポジティブな経験をより多く報告した（ $Mean = 4.07$   $SD = 1.03$  vs.  $Mean = 2.53$   $SD = 1.10$ ）。

次に、専門家への援助要請に対する態度、専門家への援助要請意図、および、援助要請期待と援助要請不安の各下位尺度をそれぞれ従属変数として、性別（2）×専門家の利用経験（2）の2要因分散分析を行った。各群に含まれるサンプル数を Table 2 に示す。分析の結果、利用経験の主効果が、専門家への援助要請に対する態度（ $F(1, 234) = 6.08$   $p < .05$ ）と専門家への援助要請意図（ $F(1, 234) = 17.68$   $p < .01$ ）に見られ、いずれも、利用経験のある群の得点の方が、利用経験のない群の得点よりも高かった。また、性別の主効果（ $F(1, 234) = 0.01 \sim 2.47$ ）および性別×利用経験の交互作用（ $F(1, 234) = 0.01 \sim 1.72$ ）は、いずれも有意ではなかった。

Table 2 分散分析で用いた各群の度数

	男 性	女 性
専門家の利用経験あり	12	33
専門家の利用経験なし	72	121

Table 3 各変数間の相関関数

	援助要請 態度	援助要請 意図	援助要請期待				援助要請不安		
			内面 安定	専門的 援助	依存的 解決	知的 学習	スティ グマ	強要 懸念	対応 懸念
専門家への援助要請意図	.26**								
援助要請 期待	内面安定期待	.22**	.13*						
	専門的援助期待	.21**	.10	.65**					
	依存的解決期待	.05	.15*	.41**	.47**				
	知的学習期待	.00	.17**	.24**	.23**	.20**			
援助要請 不安	スティグマへの懸念	-.20**	-.15*	-.11	-.07	.24**	.07		
	強要への懸念	-.18**	-.04	-.19**	-.05	.15*	.12	.52**	
	カウンセラーの対応への懸念	-.22**	-.16*	-.37**	-.31**	-.12	.03	.39**	.49**
被援助 志向性	援助に対する欲求と態度	.26**	.17	.25**	.27**	.02	-.03	-.29**	-.22**
	援助に対する抵抗感の低さ	.13*	.02	.16*	.20**	-.04	-.04	-.32**	-.30**
専門家 利用経験	ポジティブな体験	.55**	.27	.36*	.34*	.09	-.11	-.17	-.05
	ネガティブな体験	-.20	-.25	-.40**	-.09	-.25	.10	.17	.49**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

$N = 238$  ただし専門家利用経験との相関のみ  $N = 45$

## 各変数間の関連の検討

続いて、専門家への援助要請に対する態度、専門家への援助要請意図、および、援助要請期待と援助要請不安間の関連、そしてこれらの変数と、被援助志向性、過去の専門家利用の際の経験との関連を検討するため、相関係数を算出した（Table 3）。

その結果、援助要請に対する態度は、援助要請意図、内面安定期待および専門的援助期待との間に有意な正の、援助要請不安の3つの下位尺度全てとの間に有意な負の相関を示した。また、援助要請意図は、内面安定期待、依存的解決期待、知的学習期待との間に有意な正の、スティグマへの懸念とカウンセラーの対応への懸念との間に有意な負の相関を示した。

援助要請期待の各下位尺度は、互いに有意な正の相関を示した。同様に、援助要請不安の各下位尺度は、互いに有意な

正の相関を示した。また、援助要請期待と援助要請不安の下位尺度間では、内面安定期待と強要への懸念との間、内面安定期待とカウンセラーの対応への懸念との間および専門的援助期待とカウンセラーの対応への懸念との間に有意な負の相関が示された。また、依存的解決期待は、スティグマ懸念および強要への懸念との間に有意な正の相関を示した。

被援助志向性の2つの下位尺度はいずれも、援助要請に対する態度、内面安定期待および専門的援助期待との間に有意な正の、援助要請不安の3つの下位尺度全てとの間に有意な負の相関を示した。

さらに、専門家利用の際のポジティブな経験は、援助要請に対する態度、内面安定期待および専門的援助期待との間に有意な正の相関を示した。一方ネガティブな経験は、内面安定期待との間に有意な負の、強要への懸念とカウンセラーの対応への懸念との間には有意な正の相関を示した。

Table 4 本研究で用いた変数に対する因子分析

	因子 I	因子 II
スティグマへの懸念	-.71	.24
強要への懸念	-.68	.18
カウンセラーの対応への懸念	-.63	-.15
援助に対する抵抗感の低さ	.58	.00
援助に対する欲求と態度	.52	.11
専門家への援助要請意図	.31	.14
専門的援助期待	.15	.75
内面安定期待	.23	.69
依存的解決期待	-.22	.69
知的学習期待	-.14	.35
援助要請意図	.15	.17
因子間相関		.23

## 各変数に対する探索的因子分析

最後に、本研究で用いた諸変数に対し、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。スクリープロットの減衰状況から Table 4 に示すような2因子解が得られた。第1因子は、援助要請不安の各下位尺度が負の負荷量を示し、被援助志向性の2つの下位尺度と援助要請に対する態度に正の負荷量が示された。一方第2因子は、援助要請期待の各下位尺度のみで構成されていた。しかしながら援助要請意図は、いずれの因子に対しても低い負荷量を示したのみであり、いずれの因子にも分類されなかった。

## 考 察

### 変数間の関連

相関分析の結果、各変数は概ね概念から想定される理論通りの関連が示された。即ち、援助要請に対してポジティブな方向性を持つ、援助要請に対する態度、援助要請意図、援助要請期待の各下位尺度、被援助志向性は、概ねお互いに正の相関を示した。同様に、援助要請に対してネガティブな方向性を持つ援助要請不安の各下位尺度は、互いに負の相関を示した。

しかしながら、これらポジティブな変数とネガティブな変数は、必ずしも互いに対になる概念であるとは言えない結果が示された。ポジティブな変数とネガティブな変数との間には、いくつかは有意な負の相関が示されたものの、有意でない相関も多数みられた。また、これらの変数に対する因子分析の結果からは、2つの因子が得られ、一方の因子は援助要請期待の下位尺度のみで構成され、もう一方の因子には、援助要請に対する態度、被援助志向性、援助要請不安が含まれていた。そして、この2つの因子間相関は、.22と小さなものであった。このことは、援助要請は単純にポジティブ対ネガティブという2極を持つ単一軸上の概念として存在するのではなく、むしろポジティブな認知とネガティブな認知とが互いにある程度独立して存在していることを示唆している。

また、援助要請に対する態度や被援助志向性は、援助要請期待ではなく、援助要請不安と同じ因子に分類された。こ

のことは、専門家への援助要請に対する態度がポジティブであるということが、「専門家への期待が高い」というよりも「専門家への不安が低い」ということを意味している可能性がある。

さらに、援助要請期待の1つであるポジティブな変数である依存的解決期待と、ネガティブな変数であるスティグマへの懸念や強要への懸念との間にのみ、負の相関ではなく正の相関が示された。これは、心理的問題に対する十分な知識の不足を反映している可能性が考えられる。すなわち、心理的問題に対する知識が十分でないことによって、周囲からの偏見を過度に認知し、スティグマへの懸念が高まっている可能性がある。同様に、心理的問題に対する知識が十分でないことによって、治療場面における専門家の主導性を過剰に認知し、依存的な期待が生まれると同時に、かえって専門家の主導的な代わりに対する不安をもたらしている可能性が考えられる。こうした点については、この心理的問題に対する知識などを考慮しながら、より詳細な検討を加えていく必要があると考えられる。

加えて、援助要請意図がいずれの因子にも大きな負荷量を示さなかったことは、注目すべき結果である。そもそも、援助要請に関する様々な変数の関連を検討することの大きな目的の1つは、援助要請の規定因を明らかにすることである。そのため、用いられる変数が援助要請行動実行の意図と余り関連しないのならば、それらの変数を用いる意義は大きく低下する。従って、援助要請意図とその他の変数との関連については、十分な吟味が必要であると考えられる。

本研究で得られた結果に対する解釈可能性は大きく2つある。1つはこの結果の通り、援助要請に対する態度や、援助要請期待、援助要請不安が、援助要請意図の十分な関連要因ではないという可能性である。もう1つは、この結果が援助要請意図の測定の問題に起因しているという可能性である。今回測定した援助要請意図は、平均が11.69、標準偏差が5.04であり、平均値－標準偏差の値は6.65となる。これは、床効果の基準にこそ該当しないものの、得点範囲の最低値に極めて近い値である。そのため、この援助要請意図得点の極端な偏りが、相関係数を低下させた可能性がある。そのためこの点についてはまず、援助要請意図の測定方法を再検討し、再度検討を行うべきであると考えられる。

次に専門家の利用経験であるが、単純な利用経験の有無で比較した場合、援助要請に対する態度および援助要請意図では差が見られたのに対し、援助要請期待および援助要請不安では差が見られなかった。一方で利用の際の経験との関連を検討した場合、ポジティブな経験を多くしているほど、援助要請期待における内面安定期待と専門的援助期待が高いことが示された。また、ネガティブな経験を多くしているほど、援助要請期待における内面安定期待は低くなり、援助要請不安における強要への懸念とカウンセラーの対応への懸念は高くなることが示された。こうした結果は、先行研究の結果(Deane et al., 1999)と概して一致するものであり、専門家との好ましい接触経験は、援助要請をより促進することができる可能性がある。こうした点は、援助要請促進のための介入方略を検討する上で有効な視点になると考えられる。

最後に性差については、本研究では一切有意な結果が見られなかった。冒頭でも述べた通り、我が国における専門家への援助要請の性差は、明確に示されないことが多い。友人や家族などインフォーマルな資源への援助要請と異なり、専門家への援助要請に対しては、明確な性差は存在しない可能性が考えられる。

## 今後の課題

本研究は、専門家への援助要請における主要な変数間の関連を明らかにしたという点で意義があるものであると言える。特に、各変数はおおむね2因子に分類され、援助要請に対する態度は、抵抗感の低さに近いという結果が示されたことは、援助要請における態度の位置づけを明確にする上で重要な知見であると考えられる。しかしながら本研究では、援助要請意図の測定の問題などの課題も、同時に明らかになった。今後、より適切な分布が得られる形で援助要請意図を測定する方法を検討し、心理的問題に関する知識なども考慮した上で、変数間の関連をより詳細に検討する必要があると考えられる。

## 引用文献

- Ajzen, I. 1991 The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50, 179-211.
- Andrews, G., Issakidis, C., & Carter, G. 2001 Shortfall in mental health service utilization. *British Journal of Psychiatry*, 179, 417-425.
- Carlton, P. A., & Deane, F. P. 2000 Impact of attitudes and suicidal ideation on adolescents' intentions to seek profes-

- sional psychological help. *Journal of Adolescence*, **23**, 35-45.
- Cusack, J., Deane, F. P., Wilson, C. J., & Ciarrochi, J. 2004 Who influence men to go to therapy? Reports from men attending psychological Services. *International Journal for the Advancement of Counselling*, **26**, 271-283.
- Dadfar, S., & Friedlander, M., L. 1982 Differential attitudes of international students toward seeking professional psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, **29**, 335-338.
- Deane, F. P., Skogstad, P., & Williams, M. W. 1999 Impact of attitudes, ethnicity and quality of prior therapy on New Zealand male prisoners' intentions to seek professional psychological help. *International Journal for Advancement of Counselling*, **21**, 55-67.
- Deane, F. P., & Todd, D. M. 1996 Attitudes and intentions to seek professional psychological help for personal problems or suicidal thinking. *Journal of College Student Psychotherapy*, **10**, 45-59.
- DePaulo, B. M. 1983 Perspectives on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher (Eds.), *New directions in helping*. Vol. 2 *Help-seeking* (pp. 3-12). New York: Academic Press.
- Fischer, E. H., & Farina, A. 1995 Attitudes toward seeking professional psychological help: A shortened form and considerations for research. *Journal of College Student Development*, **36**, 368-373.
- Fischer, E. H., & Turner, J. L. 1970 Orientations to seeking professional help: Development and research utility of an attitude scale *Journal of consulting and clinical psychology*, **35**, 79-90.
- Halgin, R. P., Weaver, D. D. Edell, W. S., & Spencer, P. G. 1987 Relation of depression and help-seeking history to attitudes toward seeking professional psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, **34**, 177-185.
- 半田一郎 2003 中学生が持つスクールカウンセラーへのイメージ——学校の日常生活での活動を重視するスクールカウンセラーに関連して—— カウンセリング研究, **36**, 140-148.
- 木村真人・水野治久 2004 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について——学生相談・友達・家族に焦点を当てて カウンセリング研究, **37**, 260-269.
- 木村真人・水野治久 2012 学生相談に対する被援助志向性と援助不安の関連 臨床心理学, **12**, 80-85.
- 小池春妙・伊藤義美 投稿中 メンタルヘルスリテラシーに関する情報提供が精神科受診意図に与える影響
- 松岡靖子 2011 心理教育プログラムが中学生の相談欲求および相談室イメージに及ぼす影響——ある公立中学校の3年生を対象とした実践から 学校心理学研究, **11**, 3-14.
- 水野治久・石隈利紀 1999 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 2006 中学生を取り巻くヘルパーに対する被援助志向性に関する研究——学校心理学の視点から—— カウンセリング研究, **39**, 17-27.
- 永井智・新井邦二郎 2007 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, **55**, 197-207.
- 永井智・新井邦二郎 2008 悩みの種類から見た中学生における友人に対する相談行動——予期される利益・コストとの関連—— 学校心理学研究, **8**, 41-48.
- 永井智・新井邦二郎 2009 中学生における友人に対する援助要請の統計的特徴——相談行動、悩みの経験、利益・コストにおける基礎的データの検討—— 筑波大学発達臨床心理学研究, **20**, 11-20.
- 中岡千幸・兒玉憲一 2011 大学生の心理カウンセリングに対する援助要請不安尺度と援助要請期待尺度の作成 心理臨床学研究, **29**, 486-491.
- 中岡千幸・兒玉憲一・高田純・黄正国 2011 大学生の心理カウンセラーへの援助要請意図モデルの検討——援助要請不安、援助要請期待及び援助要請意図の関連—— 広島大学心理学研究, **11**, 215-224.
- Nam, S. K., Chu, H. J., Lee, M. K., Lee, J. H., Kim, N., & Lee, S. M. 2010 A meta-analysis if gender differences in attitudes toward seeking professional psychological help. *Journal of American College Health*, **59**, 110-116.
- Raviv, A., Raviv, A., Propper, A., & Fink, A. S. 2003 Mothers' attitudes toward seeking help for their children from school and private psychologists. *Professional Psychology: Research and Practice*, **34**, 95-101.
- Shaffer, P. A., Vogel, D. L., & Wei, M. 2006 The mediating roles of anticipated risks, anticipated benefits, and attitudes

- and the decision to seek professional help: An attachment perspective. *Journal of Counseling Psychology*, **53**, 442-452.
- Smith, M. L., & Glass, G. V. 1977 Meta-analysis of psychotherapy outcome studies. *American Psychologist*, **32**, 752-760.
- 高木修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, **29**, 1-21.
- 田村修一・石隈利紀 2001 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究 教育心理学研究, **49**, 438-448.
- Tijhuis, M.A.R., Peters, L., & Foets, M. An orientation toward help-seeking for emotional problems. *Social Science & Medicine*, **31**, 989-995, 1990.
- 内田千代子 2011 大学における休・退学, 留年学生に関する調査(第31報) 第32回全国大学メンタルヘルス研究会報告書
- Vogel, D. L., Wade, N. G., & Hackler, A. H. 2007 Perceived public stigma and the willingness to seek counseling: The mediating roles of self-stigma and attitudes toward counseling. *Journal of Counseling Psychology*, **54**, 40-50.
- Vogel, D. L., Wade, N. G., & Hackler, A. H. 2008 Emotional expression and the decision to seek therapy: The mediating roles of the anticipated benefits and risks. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **27**, 254-278.
- Vogel, D. L., & Wester, S. R. 2003 To seek help or not to seek help: The risks of self-disclosure. *Journal of Counseling Psychology*, **50**, 351-361.
- Vogel, D. L., Wester, S. R., Wei, M., & Boysen, G. A. 2005 The role of outcome expectations and attitudes on decisions to seek professional help. *Journal of Counseling Psychology*, **52**, 459-470.
- Wampold, B. E. 2001 *The Great Psychotherapy Debate: Models, Methods, and Findings*. Mahwah, NJ: Erlbaum.